

政區劃や行政組織に關する記事 (pp. 89—92) が面白い。モンネー
レト氏はこれ以前モンテクローチエのリコウルドゥの東方巡禮記の
注釋 (Il libro della peregrinazione nelle parti d'Oriente di
Fra Ricoldo da Monteoroce, Roma; Tipografia Poliglotta
Vaticana, 1948, pp. 130. Inst. Hist. FF Praedicatorum, Diss.
Hist. XIII) を出した聖地の中世の歴史地理の専門家で、ヤコーボ
の注釋も詳細を極めてあるが、その本領は中世イスラムの研究にあ
る。その著「十二、十三世紀に於ける歐洲のイスラム研究」(Lo
studio dell' Islam in Europa nel XII e nel XIII secolo, Citra
del Vaticana; Biblioteca Apostolica Vaticana, 1944, pp. 86.
Studi e Testi 110) はイスラム研究史として重要であるばかりで
なく、イスラム文化が歐洲文化に與えた影響を考へる者の必ず一讀
すべき名著である。新ラムーンジオ叢書の第二部・第三部については
別の機會に紹介したい。(東京大學教授)

中國近代史資料叢刊「辛亥革命」

市古宙三

中國近代史資料叢刊の「義和團」四冊が刊行されたのは、
一九五一年三月のことである。それから六年の間に、「太平
天國」八冊・「回民起義」四冊・「捻軍」六冊・「戊戌變法」
四冊・「鴉片戰爭」六冊・「中法戰爭」七冊・「中日戰爭」
七冊がつぎつぎに出版され、そして最近、一九五七年七月に
「辛亥革命」八冊の刊行をみた。その編者は、柴德廣・榮孟
源・單士魁・張鴻翔・劉迺蘇・陳桂英・張次溪の七氏であ
る。

この叢刊の編集方針は、ものによつてかなり異つてい
る。たとえば、「太平天國」は専門の研究者向きに編集されてい
て、嚴重な校訂を施して太平天國文書を網羅し、清側・民間
の記録も巷間に余り流布していない貴重なものを全文載録す
るのに努めている。「辛亥革命」はこれに反して、もつと一
般向きで、辛亥革命を専門に研究しようというわけではない
が、いまの人の研究によつてではなく、史料によつて清末の
革命運動や辛亥革命の大概を知ろうとする人には、きわめて
便利である。試みに全八冊の構成をみよう。

第一部 興中會時期の革命活動

第一冊 興中會 唐才常漢口起義 洪全福起義 蘇報案

華興會 光復會 日知會

第二部 同盟會時期の革命活動

第二冊 同盟會 民報 萍瀏澧起義 黃岡防城起義

第三冊 徐錫麟及び秋瑾案 鎮南關起義 熊成基安慶起

義 雲南河口起義 新軍起義 各地人民反清鬥争

第四冊 清廷の立憲預備 立憲派 黃花崗の役 保路運動

第三部 武昌起義及び各省起義の經過

第五冊 武昌起義

第六・七冊 各省起義

第四部 南京臨時政府及び中華民國成立の經過

第八冊 南京臨時政府 南北議和 帝國主義と辛亥革命

南北議和後の中華民國成立

これをみて明かなように、興中會の結成から中華民國の成立まで、約二十年間の主要な革命に關する事項は、ほとんどこれを網羅し、しかも各項毎に、なるべくその事件の全貌をうかがえるような史料を集めている。たとえば卷頭には清末の革命運動を概観するために、「孫文學說」第八章「有志竟成」を載せ、各地人民反清鬥争の項では「東方雜誌」の記事を取り、各省起義では、郭孝成「中國革命紀事本末」・鄒

魯「中國國民黨史稿」をしきりに引いている。これらの資料はみな清末の革命運動や辛亥革命を概観したものであるが、同種の曹亞伯「武昌革命眞史」・馮自由「革命逸史」・張難先「湖北革命知之錄」や「建國月刊」も、いずれも一〇〇頁以上を載録していて、その合計は一〇〇〇頁を越えている。全八冊の總頁が四四〇〇頁ばかりであることを思えば、本書の性質も自ら明かであろう。

特殊な研究者のみを對象にしないせいであるるか、萬遍なく項目をたて概説的な史料を掲げるほか、一般的にいって、校訂が嚴密でない、中略・節録が多い、一つの史料がズタズタに切られて載録されている。これらの點は、たしかに辛亥革命の研究者にとつては、あきたらなく感ぜられることである。しかしこれまで私たちのみることのできなかつた、あるいは容易にみられなかつた史料もたくさん載録されていることを忘れてはならない。自立會や蘇報案のことを記した張伯楨「滄海叢書」・「篁溪文存」・張競生「丁未潮州黃崗起義」錢基博「辛亥江南光復實錄」・周培藝「貴州民黨痛史」・李一「荊宜施鶴光復記」はいずれも本書にはじめて公刊されたものであつて、史料としての價值もかなり高い。特筆すべきは、故宮博物院檔案館所藏の辛亥革命關係檔案が一一〇〇頁近くも含まれていることであつて、各事件を、單に革命派側

からだけではなく、清朝側から、しかも一等史料によつて眺められるようになってゐるのは便利である。このほか既刊本でも流布が稀で、これまで筆者の眼に觸れなかつたものが少くない。陶成章「浙案紀略」・彭芬「辛亥遜清政變發源記」・詠簪「武昌兩日記」・三餘書社主人「四川血」などがそれで、いずれも貴重な史料、多少の節略はあるが、ほぼ大體を本書によつて知ることが出来る。

したがつて本書は、辛亥革命に關して大した知識を持たないものにも、史料を通して革命の大概を教えてくれるだけではなく、専門の研究者にも好史料を幾多提供してくれる。ただこのほかにも、本書に載せられたような史料は澤山あるわけであつて、たとえば、ここ四、五年の間に出た楊松・鄧力羣編「中國近代史資料選輯」・石峻編「中國近代思想史參考資料簡編」・葉楚傖編「革命詩文選」・中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會編「革命文獻」・中國科學院歷史研究所第三所編「近代史資料」・中國人民政治協商會湖北省委員會編「辛亥首義回憶錄」等の資料集の中にも、本書に含まれていない革命關係の史料がかなりみられる。

卷末には、引用書一一七種、參考書一三三種の簡單な解説が附されている。張於英「辛亥革命書徵錄」(「中國近代出版史料初編」所收)・張次溪「紀述辛亥革命史蹟書錄」(「中國

出版史料補編」所收)とあわせみれば、清末の革命運動および辛亥革命に關する史料にはどんなものがあるか、その大體を知ることが出来る。(一九五七年七月、上海人民出版社出版、新華書店上海發行所發行)
(お茶の水女子大學助教授)

東洋文庫近刊

橋本増吉著

東洋史上より見たる

日本上古史研究(東洋文庫)

論叢卅八

A五版 一〇四三頁 圖版六葉

英文要旨八頁 千八百圓

本書は、昭和七年十一月、東京大岡山書店より刊行せられた『東洋史上より見たる日本上古史一(邪馬臺國論考)』および戦後雑誌「史學」に發表せられた「邪馬臺國と大倭國との關連について」、「日本建國の年代について」の二篇に増補改訂を加え、前者を「第一篇 邪馬臺國論考」、後者を「第二篇 日本建國考」と題して收載したものである。なお、紹興板「魏志倭人傳」全文を圖版として卷首に載せ、末尾に參考文獻を附している。